

Title	伝クセノポン作『アテナイ人の国制』の試訳前編(その一)
Sub Title	A translation of the constitution of the Athenian ascribed to Xenophon, with introduction and commentary (I)
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.177- 207
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0177">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0177</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 伝クセノポン作

## 『アテナイ人の国制』の試訳前編（その一）

真 下 英 信

### はじめに

古来、誤ってクゼノポンの作品として伝えられて来た本書は、その伝承の歴史と言い、内容と言いまことに奇妙な書である。

『最古のアッティカ散文』とか<sup>(1)</sup>、『世界文学の最初の政治学的社會學的エッセー』とか称されたりもするが、近代歴史学の確立した十九世紀以来、幾多の学者により、本書の作者、制作年代、かつまた、何の為に、どこで書かれたか色々と論じられ研究されて来たにもかかわらず、未だに、クゼノポンの書ではないと言う以外に、識者の間で見解の一致が見られない。作者は、意図的に人名を挙げるのを避けていると思われ、この事実が本書をめぐる諸問題の解決を一層困難にしているのである。

従つて、本書は、既に、我々ギリシア史に関心を持つ者にとって誇るべき共通財産とも言える村川氏による優れた翻訳のあるアリストテレスの『アテナイ人の国制』と同名ではあるが、その内容は非常に趣を異にするものである。アリストテレスの書が、ソロンがどんな改革をしたか、その改革後何年目にペイシストラトスがアクロポリスを占領したか等を明確に記載しているのに對して、本書には、所謂『史実』の記述は皆無と言つて良い。こうした具体的事実の記述に欠けることも、本書の制作年代を推定する上に恨みを残している。

加えて、本書の論旨にはしばしば飛躍が認められ、この為に、ホメーロスのテキストと同様に、十九世紀の学者達により、ちぎり絵の素材たる紙の如くに寸断されもした。

本書の内容は一言にして言えば、民主制に批判的な寡頭派の人による、紀元前五世紀後半のある時期におけるアテナイの民主制、その社会の在り方に対する風刺、皮肉の書である。

『アテナイ人の国制』の試訳前編（その一）

えると、ある人の述べている様に、散文としては極めて早い時期に書かれたのかも知れない。<sup>⑤</sup>

とまれ、本書の制作年代については、種々な問題が絡み合っておりその是非は容易に決定し難い。従つて、訳注においては、この点、諸説を指摘するに止め、詳細は後編で論じられる予定である。次に、本書の史料的価値について簡単に述べておこう。

本書は上述の如く、所謂“史実”を欠き、加えて、内容の記述に作者の偏見がしばしば認められるとしても、アリストテレスの同名の書とは異なる意味で、紀元前五世紀のアテナイの政治経済社会を考察する上で極めて重要な史料の一つである。すなわち、本書には当時のアテナイの社会、民主制の実態が、作者の眼を通して記述されており、その実像を我々が分離するのはかなづかしも容易ではないが、逆に、当時、海上支配をめぐりいかなる政策論が論じられていたか、民主制が寡頭派の人々により如何なる評価を受けていたか、また、当時の民主制下の寡頭派の見解はどうのようなものであったのかなど、その一端を知る上に貴重な書と叫ぶるのである。

## 〔注〕

① Bengtson, H., *Griechische Geschichte*, 3 ed. München

1965 p. 214

ひつした史料としての本書の重要性に鑑み、ギリシア語を学び始めて、ギリシア史を本格的に研究しようとする学徒の為に、この入門書になればと思い、本書の翻訳を試みた次第である。

従つて、翻訳の方針として、文法的な注釈も少し加味しながら、なるべく逐一訳するように努めた。しかしながら、かなり複雑な文を上手に訳せたとは言えず、文体も不揃になってしまった点は否めないが、本訳が、座右に文法書と辞典を置きながら、原

文を読んで行こうとするギリシア史研究の初心者に少しでも参考になり、かつ、本訳を読むことにより、何が問題となつてゐるか、何が今迄論じられて来たかを考えることにより、読者の今後の研究の踏石となれれば、訳者には望外の幸である。

なお、本邦初訳は、

村田数之 譯

伝クセノボン、アテナイ人の國家

(『史林』vol. 16 (1931) 3-4月)

である。

最後ではあるが、本稿は一九八〇年度慶應義塾学事振興資金の援助による成果であること、並びに、翻訳にあたつては、慶應義塾大学言語文化研究所の牛田徳子教授より種々な助言をいただけたこと（文責は勿論全て訳者にあることは申つてもよい）を記し、感謝の意とした。

(5) Norwood, G. "The earliest prose work of Athens" *The Classical Journal of Philology* Vol. 25 (1929/30)  
p. 378-379

雄弁家クセノポン作

## アテナイ人の国制

### 第一章

#### 第一節

ところで、アテナイ人の国制について、彼等が国制のこの形態を採用した事を私は次の理由、すなわち、この形態を採用したことによって平民が貴族よりも良くやつて行けるように選んだが故に、是認出来ない。まさしくこの故に、私は是認出来ないのである。しかしながら、彼等がこのように国制を定めて以来、その國制をどれ程巧みに維持し続けており、かつ他のギリシア人から見れば、処置を誤つていると思われる事々をどれ程巧みに遂行しているか、この点を私は提示したい。

#### 第二節

次に、うまく行使されれば全民衆に安寧を与える、行使を誤れば全民衆を危険にさらすような官職のいずれにも民衆は関与することを要求しない（彼等は自分達が抽選でもって將軍職にも騎兵長官職にも関与すべきであるとは考えていない）。なぜなら、民衆はこれ等の役職は自から就くよりも、むしろ、最も有力なる人々に任じておいた方が遥かに有益であることを知っているからである。しかしながら、日当があつたり、家計がつぶれ役職ともなれば、民衆はそれに就こうと熱心になる。

#### 第三節

あり、国力を充実させる人であるからで、「すなわち」舵取り達、甲板長達、副甲板長達、見張人達、船大工達——彼等こそ重装歩兵達や名門の人々や貴族達以上に遥かに国力を充実させる人々であるからだ。こうした事情からして、抽選や挙手による選出によって、全ての人々が官職につけ、かつ市民の内で望む者は誰れでも「民会で」発言することが許されているのは当然だと思われる。

#### 第四節

それから次に、ある人々が驚くことに、彼等は至る所で良き人々よりむしろ卑しき人々、貧しき人々ならびに民衆派の人々に特恵を分ち与えているのである。まさしく、こうしてこそ、彼等が民主制を維持し続けていることが明白となるであろう。なぜなりも特恵を得ているが、その理由は、民衆が艦船を操縦する人で、貧しき人々や民衆達や下賤な人々達は、繁栄しその数が増加

すると<sup>(①)</sup>、民主制を発展させるからである。他方、もし、富裕者達や貴族達が繁栄するなら、民衆達は彼等自身の強力な敵対勢力を作ることになる。

### 第五節

いづれの土地でも、貴族階級<sup>(①)</sup>は民主政治に敵対する。<sup>(②)</sup>なぜなら、貴族達の間では放縱と不正<sup>(④)</sup>は最少である一方、最善なものに對する最大の細心<sup>(⑤)</sup>さがあるが、他方、民衆の間では最大の無知と乱脈と野卑<sup>(⑥)</sup>があるからである。というのは、貧困は彼等を益々恥すべき行動に驅りたて、かつ金錢の欠乏故に「彼等の」ある者共は無学かつ無知だからである<sup>(⑧)</sup>。

### 第六節

ところで、彼等「アテーナイ人」は全ての人々が平等に「民会<sup>(①)</sup>」で發言し、「評議会<sup>(②)</sup>」評議するのを許すべきではなく、むしろ、最も有能な人々と最も卓抜な人々にのみ許可すべきであつたと人は言うかもしない。しかし、この点でも彼等は、民衆にも發言を許すことによつて、實に遠謀深慮をしている。なぜなら、もし、貴族達が「民会<sup>(③)</sup>」發言し「評議会<sup>(④)</sup>」評議したならば、それは彼等自身の同類者達にとつてはけつこうなことであろうが、民衆達にとつては不利であるからである。しかるに、現實には、民衆<sup>(⑤)</sup>と言えども、欲するなら誰れでも起立してから發言して、自分自身ならびに自己の同類者の利益を計つてゐるのである。

人は言うかも知れない<sup>(①)</sup>、そのような人間は、自分自身ないし民衆にとつて一体何が利益であるのかわかるだろうか、と。ところが、彼等「民衆達は」その人間「民衆の發言者」の無知と野卑と「民衆への」身貴<sup>(③)</sup>が、貴族の卓抜さと慧知と「民衆への」惡意より遙かに有益であるのを知つてゐるのである。

### 第七節

まさしく<sup>(①)</sup>、國家はこのような風習<sup>(②)</sup>によつては最善たりえないであろうが、しかし民主制はまさしくこうしてこそ最も良く保持されよう。なぜなら、民衆は例え善き法によつて國家が治められたとしても<sup>(⑤)</sup>「そこで」自分が奴隸として仕えることは欲せず、むしろ自由であり、支配權を握ることを欲し、悪しき国制のことはほとんどの氣にとめないからである。なぜなら、善き法によつて治められていないとあなたが考へてゐる当のもの「國制」、まさしく、それによつて民衆自身は自己の権勢を獲得し、かつ自由であるからである。

### 第九節

しかし、もしあなたが善き國制<sup>(①)</sup>を探し求めるなら、「そこでは」まず始めに、最も才たけたる人々が國民に對して法を定めるのに氣付かれるであろう。次に、貴族達は民衆達を厳しく罰するであろう、かつ、貴族達が國政について「評議会<sup>(④)</sup>」評議するであ

らうし、かつまた、常軌を逸した人々が「評議会で」評議することも「民会で」発言するのも、そもそも民会に参加することさえ許さないであろう。それ故、これら善き処置の結果として、民衆はたちまち隸属状態に陥ることだろう。

## 第十節

他方、アーティナイでは奴隸ならびに、メトイコイ達の放埒さはその極にあり、そこでは、彼等を打擲するも許されず、また、奴隸はあなたに道を譲ることもしないであろう。なぜこれがアーティナイの慣習なのか、私は説明しよう。「そのわけは」もし仮に、奴隸であれメトイコイであれ解放奴隸であれ、自由人に殴られる習わしがあつたならば、人はしばしばアーティナイ人を奴隸と思って殴つたに相違ない。なぜなら、そこ「アーティナイ」では、市民は衣服に關して、いささかも奴隸、メトイコイよりパリツとしておらず、かつ風采に關しても決して上の方ではないのである。

## 第十一節

また、そこ「アーティナイ」では、奴隸が優雅に暮らし、また「彼等の」一部の者が豪盛な生活さえするのを「アーティナイ人が」許しているのにもし人が驚くなら、この点もまた、彼等アーティナイ人が故あつてしていることは「次の点を考えれば」明白であろう。すなわち、海軍力を持つ國では必然的に「主人が奴隸の」稼ぎの一部を取るために、家計上奴隸に隸従しなければならないし、かつ、彼等を自由にまかせる必要があるのであるのだ。そして、

奴隸が富裕である所、そこではもはや私の奴隸はあなたを恐れてもなんら得になるものではない。しかし、ラケダイモンでは、私の奴隸は、あなたを恐れるのが常であった。しかし、「アーティナイでは」仮にあなたの奴隸が私を恐れるようなことがあるなら、彼は身の危険を犯さぬために恐らくは自分の金をさし出すことであろう。

## 第十二節

このような理由で、奴隸には自由人に対し、メトイコイには市民<sup>①</sup>に対して言論の自由を我々アーティナイ人は認めた、というのも、國家は商売の多さ<sup>②</sup>ならびに艦船のためにメトイコイを必要としているからである。よつてこの故に、メトイコイにもまた我々は当然のこととして言論の自由を認めたのである。

## 第十三節

ところで、そこ「アーティナイ」では、民衆は体育訓練をしたり、音楽に専念するのをやめている<sup>③</sup>、なぜかと言えば、これらのことに從事する的是不可能と知つて、「よつて」それを不適当と判断したからである。他方、合唱隊奉仕<sup>④</sup>、体育奉仕<sup>⑤</sup>、三段櫂船奉仕<sup>⑥</sup>では、富裕者達が合唱隊奉仕の「ために出費して」任に當る一方、民衆はその奉仕に従い、富裕者達が体育奉仕の任に當る一方、民衆が三段櫂船奉仕ならびに体育奉仕でその奉仕に従うこと知つてゐるのである。とにかく、民衆は歌つたり、走つたり、踊つたり、船に乗つて航海して、金を得るのが当たり前だと思つてゐる

が、それは自分達が儲けて、その分、金持達が貧乏になるためである。また、裁判所においても、彼等「民衆」は、自分達の利益ほどには正義に关心を持たないのである。

#### 第十四節

さて、同盟諸国について「言えば」、周知の如く、彼等「アテナイ人」は、「同盟國のもとへ」出航して、貴族について偽りの告訴をなし、かつまた彼等を憎悪するのであるが、それと言うのも、支配者は被支配者によつて必ず憎悪されるものであり、他方もし、富裕者達と貴族達が「同盟」諸国内で勢力を得て来れば、たちまちにしてアテナイ民衆の支配は瓦解するであろうことを知つてゐるからであり、そしてまさしくこの故に、彼等は貴族から市民権を剥奪し、財産を没収し、追放し、死刑に処する一方、民衆への勢力を強化発展させるのである。これに対しても、アテナイの貴族達は、「同盟」諸国で貴族を常に保護するのが自分達の利益になることを知つてゐるから、同盟國の貴族達を保護するのである。

#### 第十五節

ところで、人はこう言うかもしない。もし、同盟諸国が「豊かで」、金を貢ぐ力があるならば、そうさせることこそまさしくアテナイの覇權「の原因」である、と。しかし、「アテナイの」民衆の考えによれば「そうではない」、アテナイの個々人が同盟諸国から金をもらうにしても、同盟諸国自身は、生きるに

必要な「最底限の金を」持ち、陰謀を企む余裕がなく、ただ「あくせくと」働く方がはるかによろしきを得てゐるというのである。

#### 第十六節

次に、アテナイの民衆は次の点、すなわち、裁判のためにアテナイに来航するよう同盟國に強制した事でもまた、思慮を欠いた「措置と一般に」思われてゐる。しかし、こうした批判に対して、彼等は、この、「強制」より、どれ程の利益をアテナイの民衆が得てゐるかを列挙する。まず第一に、彼等は供託金より年間を通じて賃金を受取る。それから次に、家に座しながら出航することなく同盟國を管理し、かつ法廷においては、「同盟国内の」民衆派を救済する一方、その反対派を殲滅する。だがもし仮に、同盟國各々が別々に自國で裁判を行うならば、彼等はアテナイ人に對する憤懣故に、自国民の中で、アテナイの民衆と取り分け親しい人々を殲滅したに違ひない。

#### 第十七節

これらに加えて、アテナイで同盟諸國の裁判が行なわれば、アテナイ民衆は次の如き利益を獲得する。まず、國家についてペイライエウスでの百分の一税<sup>①</sup>が增收となる。次に、「個人について言えば」長屋<sup>②</sup>を持つてゐる人はより多くを利益を得る。次に、馬車や貨物出来る奴隸を持つてゐる人も同様である。次に、伝令達は同盟諸國の人々の滞在により、より多くの利益を得

## 第十一十節

そつて、航海の経験ないひに訓練により<sup>②</sup>、彼等は優れた舵取りとなふ。彼等のあら人々は商船の、他方、ある人々は貨物船の舵取りのじて練習を積み、ある人々はそんかいさいに三段櫂船に乗り込むことになつた。<sup>④</sup>多くの人々は生涯<sup>アヒト</sup>おもかじめ練習を積んでいたから、艦船<sup>アヒト</sup>に乗り込むや否や直ちに漕ぐんとが出来た。<sup>⑤</sup>

〔続〕

これらに加えて、仮りにもし同盟国〔の人々〕が裁判のために「アテナイに」行くことがなかつたならば、彼等アテナイ人の中で「アテナイより同盟国へ赴くべく」出航する人々、すなわち、將軍、三段櫂船奉仕者、それから大使達を尊敬するだけであつたわ。しかるに現実には、同盟国の人々は、アテナイにやつて来て、ほかでもなこまわしく民衆の手によつて——實に、このことがアテナイにおける法である——罰を受けたり罰を科したり〔して裁判〕せねばならないと知つて、アテナイの民衆に追従せらるを得ないでいる。そして、法廷において、彼等は嘆願し、誰れであれ入廷者と〔好意を求めて〕握手しなければならぬ。こうした理由故に、同盟国は益々アテナイ民衆の奴隸と化したのであつた。

## 第十九節

これに加えて、国外にある財産〔を管理する〕ため、だらうに外国に派遣される官職〔に就く〕ために、アテナイ人自身とその従者達は知ら<sup>アヒト</sup>知らない間に櫂で航海する技を学んだ。なぜなら、人はしばしば航海すれば、主人も奴隸も權を握らざるを得ないし、また、航海に関する専門用語<sup>アヒト</sup>を知らざるを得なからぬである。

『アテナイ人の國制』の試訳前編（やの1）

### 文獻略観表

① ネキスル

Bowersock=G. W., *Pseudo-Xenophon, Constitution of the Athenians*; Loeb Classical Library, Xenophon VII scripta minora, ed. Marchant, E. C., Bowersock, G. W., 1968 (2 ed 1971) 訳註。

Frisch=Frisch, H., *The constitution of Athenians*, Copenhagen 1942 (rep. 1976)

Kalinka=Kalinka, E., *Die pseudoxenophontische Athenkstitution*, Einleitung, Übersetzung, Erklärung, Berlin 1913

Marchant=Marchant, E. C., *Xenophontis Opera Omnia*, vol. V Opuscula, Scriptorum Classicorum Biblioteca Oxoniensis, Oxonii, 1920 (1969)

翻訳したいたゞき Bowersock のトサベトを証長ムニ章

節の区分も彼に従つた。しかし、黒船によることは彼の校訂に従つたわけではない。黒船によつては、彼のテキストと平行して参照した Marchant, Frisch, Kalinka のトキベトに従つた所もある。この場合、意味が大きく変り、内容上重大な差異が生じた時のみ、訳注に付記つておいた。

なお、

- (1) 訳注に出でるのは A, B, C, M は Bowersock の用ひる  
日本語の訳すもの。Marchant も出でない。日本語の  
訳しの場合は、注釈では MSS とある。
- (2) < >は日本にはないが、校証者による補われた語句である  
No.
- (3) [ ] は意味を明確にする為に、訳者が補つた語句である。
- (4) ( ) は日本中の注釈的な文章で、原作者の文が否かされ  
られるしない語句である。
- (5) ギリシア語を仮名書きした細胞の如きねだつては、大体實用  
に従つた。

③ 傷政譜文

Bowersock HSCP=Bowersock, G. W., "Pseudo-Xeno-  
phon" HSCP vol. 71 (1966) p. 33-55  
Diller=Diller, H.; Gelzer, K. I., *Die Schrift vom Staat  
der Athenen* Q軸譜, *Gnomon* vol. 15 (1939) p. 113-124  
Forrest=Forrest, W. G., "The date of the Pseudo-Xeno-  
phonic *Athenaion Politeia*" *Klio* vol. 52 (1970). p.  
107-116.

Fränkel=Fränkel, H., "Notes on the closing sections

of Pseudo-Xenophon's *Constitution of the Athenians*" *AJP* vol. 68 (1947) p. 309-  
315  
Fuks=Fuks, A., "The "Old Oligarch"" *Scripta Hierosolymitana* vol. I (1954) p. 21-35  
Gelzer=Gelzer, K. I., *Die Schrift vom Staate der Athener*, Berlin 1937

Gomme=Gomme, A. W., "The old oligarch" *Athenian studies presented to William Scott Ferguson* (HSCP Suppl I (1940)) p. 211-245

Haffter=Haffter, H., "Die Komposition der pseudo-

② 翻訳  
トキベトの話題でなく Bowersock, Frisch, Kalinka の文  
は、

Moore=Moore, J. M., *Aristotle and Xenophon on democracy and oligarchy*, Berkeley and Los Angeles, 1975

Lactor=Lactor No. 2, *The old oligarch, pseudo-Xenophon's constitution of Athens, introduction and translation*, London 1968 (1978)



- 1969)
- Finley I=Finley. J. H., "Euripides and Thucydides"  
*HSCP* vol. 49 (1938) p. 23-68
- Finley II=Finley. J. H., "The origins of Thucydides' style", *HSCP* vol. 50 (1939) p. 35-84
- Gomme, HCT=Gomme. A. W., *A Historical commentary on Thucydides*, Oxford 1945-
- Harrison I=Harrison. A. R. W., *The law of Athens, the family and property*, Oxford 1968
- Harrison II=Harrison. A. R. W., *The law of Athens, procedure*, Oxford 1971
- Hignett=Hignett. C., *A history of the Athenian constitution to the end of the fifth century B.C.*, Oxford 1952 (1962)
- Hopper=Hopper. R. J., *Trade and industry in classical greece*, London 1979
- Jones=Jones. A. H. M., *Athenian democracy*, Oxford 1957 (1960)
- 久保二郎『古希腊の政治』(新潮文庫)  
昭和 1966-1967
- Lesky=Lesky. A., *Geschichte der griechischen Literatur*, 2 ed. München 1963
- Lipsius=Lipsius. J. H., *Das attische Recht und Rechtsverfahren*, Leibzig 1905-1915 (rep. 1966)
- Meiggs=Meiggs. R., *The Athenian empire*, Oxford 1972
- Meiggs-Lewis=Meiggs. R.; Lewis. D., *A selection of Greek historical inscriptions*, Oxford 1969
- Meyer=Meyer. E., *Forschungen zur alten Geschichte II*. Halle 1899 (rep. 1966)
- Morrison-Williams=Morrison. J. S.; Williams. R. T., *Greek oared ships 900-322BC*, Cambridge 1968  
(新潮文庫) 横川 1980
- Ostwald=Ostwald. M., *Nomos and the beginnings of the Athenian democracy*, Oxford 1969
- Parke=H. W., *Festivals of the Athenians*, London 1977
- RE=Pauly; Wissowa; Kroll, *Paulys Realencyclopädie der klassischen Altertumswissenschaft*. Stuttgart 1893-
- Schmid-Stählin=Schmid, W.; Stählin. O., *Geschichte der griechischen Literatur*, vol. I. 3, München 1940 (rep. 1961)
- Zimmern=Zimmern. A., *The greek commonwealth*, Oxford 1911 (1961)

(5) 文法書及び辞書

Denniston=Denniston. J. D., *The greek particles*, Oxford 1934. 2 ed. 1954 (1970)

Goodwin=Goodwin, W. W.; *Syntax of the moods and tenses of the greek verb*, London 1889 (1966)

Kühner-Gerth=Kühner, R.; Blass, F.; Gerth, B., *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*, Hanover 1890-1904 (1964)

L-S-J=Liddel, H. G.; Scott, R.; Jones, H. S.; *Greek-English Lexicon*, Oxford 9 ed. 1940 (1964)

Passow=Passow, F., *Handwörterbuch der griechischen Sprache*, Leipzig 1841-1857 (1970)

Smyth=Smyth, H. W., *Greek grammar*, Cambridge Massachusetts 1920 (1971)

Schwyzer=Schwyzer, E., *Griechische Grammatik*, München 1939-53

以上の外、古絵の略記は常識的なものが多い故、煩雑を避け、1つ1つの記載せなかつたが、大体、L-S-J のそれに従つた。

### 訳注

(1) 表題について簡単に説明しておきたい。

古代の書物には表紙がなく、今日的な表題もなかつたましく、クロエヌスやツキディイデスは文頭に作者名、主題、作者の國名を挙げてゐる。一般に、表題は作者自身が名付けたものではなく、後世、多分くノリバム時代の学者達が、作品目録を作成したり、図書館に収納する際に整理の必要上から文頭の句ながらいわむかだものと題ねれど。(Kalinka p. 84)。

『トートーナイ人の国語』の翻訳前編 (Nの1)

ここに訳した表題も、日本AMの「がほんじふのド」には「雄弁家」の語が欠けており、Bには全く表題がない。

なお、日本の中井に「Reynolds, L. D & Wilson, N. G., *Scribes & scholars*, Oxford 2 ed. (1974)」が、簡潔で優れた入門書である。

雄弁家 'πρότοπος'

なほんのものが何が何がわかるか、もし解れば、日本のお承認程や、作者を推定する1つの手掛にならかも知れず面白いのだが、その縦縛は残念ながら不明である。

クセノポン作 *Eὐορῶντος*

紀元後1世紀のポルクスや同五世紀のストベイオスなどは本書をクセノポンへの作唱といつてゐるが、既に紀元前一世紀マグネシアのテメトリオスは、本書をクセノポンの作品でなじみつけた可能性がある。

本書の作者問題は後編で論じられるが、それがあたって史料的な詳細についてTreu p. 1930ff 参照。

国制 πολιτεία

国制と訳したが、この語の多義性、訳語ならびにギリシア人のヨリティア論の種類については村川 p. 299, Schmid-Stählin p. 149, Treu p. 1935ff 参照。

「国制」と題しても、本書には具体的、客観的なアーティスティックの歴史、現行制度などの記述は見当らない。本書は、作者が民主制批判をなすぐく政治的意図をもつて書いた意見書といふべきものである。

## 第一章

## 一節

(1) μηνέδε δέ

*περὶ δὲ μεταρθρίσιοις μηνέδε* が現われてゐるので、何か文章が途中から始まつて止つたものか、何から、何に連続したものが現われたものか、それとも、作者自身はアテナイの外に居て、そこからアテナイの現国情制を眺め批評したのか、の疑問が生じてくるが、いずれの理由ともはゝあつた。

眞頭部分が欠けて終の完全なトキストは出でられないから、Rösch (Roscher, W., *Leben, Werk und Zeitalter des Thukydides*, Göttingen 1842 p. 248, 539) もこの小辞の始まりを接と眞頭部分に欠文があると能速かに指ししなる。Nestle p. 242) がおる。

しかしながら、眞頭に δέ が現われる実例は希ではない。δέ がその時に応じて種々な意味を持つことによれば、Denison p. 171-173 を参照。具体的な例についで Kalinka p. 84-88 を参照。

Kalinka loc. cit. によると、νηδέ δέ は文を人々がやめたかも議論の最中に人々が新しい次のトーマに移行して止めるための用意を取つて役目を演じてゐる。

従ひて、文頭に欠文を導く必要はない (Meyer p. 401)。しかし Gelzer p. 102 は「クラクノイタベ以来の科学的イホニア散文と現へたるおのづねた眞頭形は、であるがゆゑに δέ」。Xen. *Apologia*; Hell. の眞頭部分を参照。

(2) 国制の形態 τοῦτον τὸν τρόπον τῆς πολιτείας

τοῦτον (<οὗτος) は = しの = し訳してあるが、οὗτος が

むいと最近なものを持ち δέ とのう語があつて、心から、作者がなぜ δέ でないか、οὗτος を用いたのか、国體の区別をされほどに重視しなかつたためか、それとも、作者自身はアテナイの外に居て、そこからアテナイの現国情制を眺め批評したのか、の疑問が生じてくるが、いずれの理由ともはゝあつた。

なお、四節に始め δēmokratia (民主制) の名称が出てくるが、作者がここで『國制の』の形態で具体的に何を指しているのか詳らかでない。この点、種々な見解がある。その内、ふくつかの説を擧げてみる。Treu p. 1948 はクレイステネスの改革、Gelzer p. 81f はヒュドリスの改革、Hohl p. 31 はハキドリス追放後の民主制を考へてゐる。これに対し Frisch p. 185-186 は、特定の改革によって成立した制度を指すのではなく、當時のアテナイの全体的社會的状況を示すものとして考へてゐるが、この見解が妥当な線であつた。

アテナの民主制が幾多の繊維を経て成立した経過については AP を参照。

(3) しの形態を採用した τρόπον δένεν

後述、『の』のいと国制を定めて以来、と同様に、τὸν τρόπον を複数中性 τρόπων で表わしてゐる。これは作者が一国制の種々な具体的特徴や現象を擧げており、かつそれらに重点を置いたためである (Kalinka p. 88)。単数、複数の扱いについて Wackernagel, J., *Vorlesungen über Syntax*, Basel 1950 vol I. p. 73ff, 特に p. 91ff 参照。

(4)

平民……貴族 πονηρὸς·κορητός  
両原語とも本来、『悪い人々』……『良い人々』との如き倫理的  
意味が基本である。仮に、平民、貴族と訳したが、固詰らぬ、  
常に、作者あるべきその文脈によつて種々な陰影をともなつて  
使用われており、ギリシア人の政治思想を理解する鍵となる  
語である。

本書におこしゆ、Frisch p.186, Bowersock p.469-470 及  
Kalinka p.88 によれば、作者はある時には政治的社會的意味  
合を込めて使用したり、時には倫理的意味を第一に考えたり、  
またある時は敵意や好意の念を込めて使用しており、その意  
味はかならずしも統一されていない。この点、Gomme p.223  
も参照。  
いつした多義性は本書のみの特徴ではなく、類書にしきつば  
みられる表現形式であることは、Whibley, L, *Greek oliga-*  
(rep.1975) が詳しく述べる。

従つて、本稿では、Lactor の如くに訳語を統一するなどは  
せず、前後の文脈から、その都度適切な語やれる訳語を用い  
た。しかし、場所によつては作者がこゝれの意味に用ひてこな  
か定かでなく、また両義的に用ひた時は必ずしもそのものだ、  
なるべく原文を注記しておいた。

たゞ、この語の他に作者は、beltistoi, dunameno, dēm-  
otikoi, dēmos (アテナイ人、三章十節、二章十八節、一章四  
節、一章二節に初出) 等も多義的に使用しているが、これらの

語の扱いも同様とする。

この種々な用語について、上巻の Whibley op.cit. の  
他、Neil, R. A, *The Knights of Aristophanes*, Cambri-  
dge 1901 (rep. 1966), Appendix II "Political use of  
moral terms" を参照。

(5)

前の "採用した" (*εἰλόποτο*) もつも制度的な用法の意味合が  
強い。

周知の如く、この語は "民衆決議"、"民衆たるがに評議会決  
議" 等に、定形句式に用ひられてゐる。Meiggs-Lewis No.  
14, 46, 52 など参照。

ここで作者がこゝにした法制的な意味を込めたこの語を使用し  
てゐるか否かは、やれしないが、"定めた" と訳してもよい。

(6)

"され程巧みに *ἀσ* *εῖ*  
*πάττονται* の両方にかけら。わなわち、作者はアテナイ人  
の国制に対して批判的ではあるが、その政治機構がうまく機能  
してゐる点は評価しているのである。この二点をしっかりと把握  
することができる本書を理解するために極めて重要なである。

作者は "維持" と "遂行" で本書の内容を冒頭部分で提示し  
てゐる。大槻としては、第一章、第二章で前者を、第三章で後  
者を扱かれてゐる。

## II 節

Memo. I. 2. 58; IV. 2. 37.

(3) 特惠を受ける πλέον ζητεῖ

この辺はテキストが乱れています。以下は Bowersock のテキスト。M に従ふ。MSS の *πλέον δικαιος* はこの問題は、作者の所在をアテナイ国内に求めるか、国外に求めるかの問題にかかわって来るとしてかつて、色々と論じられた。Frisch p. 91-98, p. 187 は、アテナイ国外の者によつて本書が書かれたと推定し、Nestle p. 242 はアテナイ国外よりの国内の寡頭派に向ひて、何者が書いて書かれたとし、Hohl p. 26 はアテナイ国内でアテナイ人によって書かれたとし、Gelzer p. 76-78 は内外の寡頭派に向けて書かれたとしている。

しかし、以上の議論の立場も確証に欠けるために最近ではこの問題について余の論じられていない。

(2) 貧民……民衆……名臣……富裕者 *οἱ πένητες····· δῆμος····· τῶν γενναίων····· τῶν πλονοσίων*

上述の如く、原文は A-B; B'-A' の Chiasmus の形をとっています。

また、原文は "貧民達も民衆も" (*οἱ πένητες καὶ δῆμος*) といふ構文になつてゐるが、"貧民" も "民衆" も異なる階層を示すものではなく、同一階層を、一方は経済的視点より示し、他方は社会的視点より示してゐると言えよう。

Jones p. 136 によれば、MND の "民衆" (dēmos) は眞体名とは大体テテース階級にあたるところである。cf. Xen.

(4) 民衆が艦隊を操縦する人 δῆμος····· εἰδούσων τὰς νάυς  
三段櫂船の漕手がいかなる階層の出身者であつたかはいかんが、少しも明らかでないが、奴隸やメトイコイなどもいたことは確実のようである。Diod. XI. 43. 3 参照。

この点につき Thuc. I. 143. 1; III 16. 1 久保の注釈、Amit. M, *Athens and the sea*, Brussels 1965 p.

30-49. Busolt SK p.296ff; Morrison-Williams p.254ff; Whitehead, D., *The ideology of the Athenian metic*, Cambridge 1977, 第2章 p.82ff, p.84ff. Meiggs-Lewis No. 23, トマス・ベイクン著『法と神の參照』。

海軍、船 (*ναῦς*) はアレクサンダルの敵艦船や艦隊つた (Morrison-

Williams p.244) が、多くの漕手たる農業者たちの心地よい生活を示す。 Arist. Pol. IV. 1291 b21ff 参照。

作類が『民主衆』 (*dēmos*) の語をかなり広義に使用したことの理由は、民主衆に対する農業者たちの下層市民が国家の支柱となるところの民主制の揶揄を多分に示すものと思われる。しかし、作者の基準の漁村は別として、ここに政治の本質に対する鋭い洞察が示されているといふべきである。このではなかつた。

だが、トトーナー人は終じた農耕時代の時代背景は、ハサウエスの述べてゐる (Thuc. I. 142. 6-143)。

(5) 同様な概念が Plat. Leg. IV. 707A-B で示されてゐる。

(6) 船取の達 *κυβερνήται*

1) 故羅船の艦長、修理などは、故羅船奉仕者 (*τρυπάρχος*)

の仕事であった (本三 p.273) が、実際の航海において船尾にあらわす指揮官で全船の指揮を取つたのが船取のやう。従つて船頭の記した方が良かぬしれど、彼は田から船を取つ (Morrison-Williams p.267. Plat. Resp. I. 341C. cf. Friesch p.189)、助手の船員の見張人 (*πρωφράται*) に航海の必要とした金の支拂ふべき。

この見張人は経験を積んだ漕手がなり、あるいは田耕を積んで船取の役たのが一般的であった (Aristoph. Eq. 541-544)。彼は *πρωφρέός* すなはち船長 (*L-S-J. sv. πρωφράτης*)、船先に立つて、船取の協力して航洋の危険を防止すべく見張の役をもつてゐる人物 (Morrison-Williams p.266-267. Plut. Agis I)。この用語を命ぜて詠つておる Busolt SK p.1206 n. 1 を参照。

(7) 田板長達 *κελευσται*

見張人のトコロハ、漕手のたまに招手を取つたら、船取の命令を伝へたりかべ。 Morrison-Williams loc. cit. Aristoph. Ach. 554, Ran. 197ff, 207, 269. sv. Suidas *κελευστής*。

(8) 船田板長達 *πευργκόνταρχοι*

原義は「五十人のキャラットハンドあるいは、」故羅船の船頭を果して、たか不明である。故羅船奉仕者の漕手を務めるところとの訳をやむを得ない (Morrison-Williams p.268)。船員の組合支那など年少の船員が立つて、船頭を務めること (Köster, A., *Das Antike Seewesen*, Berlin 1923 p.126)。

(9) 見張人 *πρωφράται*

注(6)を参照。

(10) 船大工達 *ναυπηγοί*

*ναῦς + πηγηνοί* より作られた語。富裕者である故羅船奉仕者に異なる、実際に造船を携わる職人、従つて、平民であつた。百八十人前後の漕手で動く船には、航海中でも船大工が必要であったのであつた。

ナーナトの論文に於いては、Köster op.cit., Morrison-

Williams, Kromayer-Weith, *Heerwesen und Kriegsführung der Griechen und Römer*, München 1928, p.187ff 参照。

たゞ、IG.II<sup>2</sup>.1951, 著 I. 79ff や、本節の正の論題を論載してゐる。

(11) 重装歩兵擲

MSS ゼ πολμαν διεσηγα, Kalinka, Marchant, Frisch

ルス Krüger の論文中從じ δπλεται とある。

重装歩兵と云ふ用法は甚、裝備は自前やうだのやうれなりの資力が必需だねうた。しかし、重装歩兵の中心階層やうだ Zeugitai の母なる一族は、一やべ、海軍団やうだのや、町體 demos との對比を明確とするたるに και οι γενναὶ καὶ οἱ χρήστοι とある( cf. Cartledge, P., "Hoplites and heroes " JHS 1977 p. 24) のである。

事実、Zeugitai の曲々艦隊に連携する由だ(Thuc.

III.16 たゞも久保の注釈 p.386-387 参照, cf. VII.63. 2; 67. 2; VIII.24. 2. VI.43)。

此衆の種々なタペストリに於ては Arist. Pol. IV.1291 b21ff 参照。

たゞ、重装歩兵戰術の成立と政治的變化を闡説せし H. Nilsson, M. P., Klio XXII (1929) 編) に於いては步兵が主たる軍 Snodgrass, A. M.,

"The hoplite reform and history " JHS LXXXV 1965

p. 110-122 参照。

(12) ハーナーの民主制と海軍力の発展との関連は、前節にて述べ、人々が如何なる人材を擲選するかが問題である。<sup>ノ</sup> Aristoph. Ach. 161-163; AP. XXVII.1; Arist. Pol. V.1304 a20ff;

軍隊の組織の關係に於ては Arist. Pol. 1297 b3,

b16-24, 1274 a10, 1291 b23, 1304 a20ff, 1321 a12ff 参照。また、ハーナーの民主制の經濟的側面に於ては Jones p.1ff を参照。

たゞ、軍の寡頭派的な考えに立つてても、海上攻撃による國家を余り極く評価していなかつたアリスト(例へば Leg. IV.706C) とアリストテレス(例へば AP XLI.2) と較べて、本書の作者が、海軍力による攻撃や、一つの政黨の實態に於ける議論には耳聴し難い。

(13) 兵人抽選の民主制の關係に於ては Arist. Pol. VI.1317 b10ff や参照。

しかしながら、抽選と民主制の関連の本質は何をもたらすか、かたひかしの明確でない。抽選のもののが意匠のクーラハム(田辺眞之助訳、古之都、田水社(3 ed. 1968 p.265ff) のもとと將校に依る議論の他にいかある未だ定説はない。

Hignett p. 228ff, Staveley, E. S., *Greek and Roman voting and elections*, London 1972 著 p.54ff 参照。

無論、希臘の多くの城邦では軍事的職務を終了した後は、AP.

XLIII 標記する( cf. Zimmern p. 164. n 1)

役人抽選について Hdt. III. 80 に記載される。⑭

此主制下の官職への就任、田地を発給するなど、匪兵もいたが、アリストクレースの演説によれば (Thuc. II. 37 参照) 久保の注を参照)。

⑮ Aristoph. Ach. 45 参照。

### III編

① 次に *διπετος...μεν*

内容的には前節よりも続かなる。11節では市民の平等を述べるのに対し、本節では特定の役職への就任を庶民自身が放棄している事実が述べられてゐる。cf. Thuc. II. 37, 1.

本書で述べた前文における整句しない例が多く。Schmid-Stählin p. 151 n. 7 参照。

② 原文では安寧一であく、失敗一危険の Chiasmus を形成して内容を強調している (cf. Thuc. II. 65. 7; 35. 1)。

③ 平民が就任権を放棄している役職が二つあるのが、すぐ後で述べる軍事的役職以外は不明であるが、Kalinka p. 101 では taxiarchos, phylarchos, Phrourarchos, Toxarchos などを挙げてゐる。

④ 十人の将軍と一人の輸出畠頭は毎年選出されていたが、その方法について AP XXII. 2, 末三 p. 182-183; AP XLIV. 4; LXI など参照。この輸出畠頭は人々の富裕から有力な人々であった (Kalinka p. 104-105, Busolt SK p. 892-893)。本文から Stail p. 71-73 でクラッシュの英訳翻訳の出 (Ar-

istoph. Nub. 586; Thuc. IV. 28) も本書成立の Terminus ante quem である。が、Frisch p. 192-193 の参照。

⑤ 最も權力がある人々 *τόν διναράτον διναράτον* L-S-J sv. *διναράτος* 参照。この語が政治的な意味合いで使用された場合では、『影響力ある人々』、『財産ある人々』などと意味する (Kalinka p. 104, cf. Whibley op. cit. chap IV)。

従って、貴族の経済的な弱体化が民主制による抑制であるとする考え方を民衆は持っていたが (Kalinka p. 104-105) 事実は、古代民主制の考察の際に指摘されたばかり。十三節を参照。

⑥ 田畠などについては APL XII, Aristoph. Eq. 50ff; Vespa. 595ff 参照。この制度がトレーナーとしての回転留めのルートを始めたか議論のある所もある。Finley. M. I, "The fifth-century Athenian empire; A balance-sheet" p. 122 (*Imperialism in the ancient world*, Cambridge 1978 訳収) が和訳的と評べるのと較べて de Ste Croix. G. E. M., "Political pay outside Athens" CQ XXV 1975 p. 48-52 では、テナヤ以外でものの程度があつたとしている。

⑦ 家計がつねに好んで *δημητρίας εἰς τὸν οἶκον* 所謂田畠 (mistrphoria) が問題であるとの注意。いつした利益の具体的な内容については AP XXIV を参照。が、三篇の篇を述べたところは概略がわかるのがよろしく。

## 四節

それから次に *ἐπειτα δέ*

三節冒頭の “次に” (*ἐπειτα...μὲν*) に続く。しかし、ここで内容は前節とつまづく続かない。三節が事実を述べてゐるのに對して、本節以下では制度の動機が述べられてゆく。

(2) 後に明らかになつていくように、作者はしばしば、アテナイの民主制を批判する人々を論駁する。この点をしきりに把握するのだが、本書を理解する上に極めて重要な鍵となる。六、七、十一、十四、十五、十六節も参照。

Frisch p.195 は、本書にみられる作者の愛国的氣質から考へて、作者はアテナイへの移住者であつてアテナイ民主制批判を反諷するべく本書を記したとみてよろ。

“驚く” (*θαυμάσειν*) は詰の出でに好まれる表現である (十一節。Xen. Mem. I. i.)。

(3) *ἱκετεῖς πανταχοῦ*

範囲はアテナ一国内のみで、同盟諸國まで拡がらなことを Kalinka p.106-107 は指すところ。異説については Kalinka loc. cit. Frisch p.195 を参照。

(4) *καὶ οἱ ἄλλοι*

原文は *τοῖς πονηροῖς καὶ πένηται καὶ θημοτοῖς* が *τοῖς χρήστοῖς* だ。<sup>1</sup>

(5) *καὶ οἱ οἰνοπόται*

原文は *οἱ...πένητες καὶ οἱ θημοτοῖ καὶ οἱ χρείποις* だ。<sup>2</sup>

(6) スペルタの將軍ブランダーはペロポンネソスの兵士達に呼びかけるのにあたり “諸君の母國は多が少を支配する衆愚の國にはあらずか、少が多を率ひの國、むろびてこら (Thuc. IV.

126. 2, 久保訳)。

(7) 富裕者達や貴族達 *οἱ πλούσιοι καὶ οἱ χρηστοί*

L-S-J sv. *χρηστός* II. 2

(8) 民衆達 *οἱ θημοτοῖ*

MSS にはない Kirchhoff の読みであるが、内容的には上述の “貧しき人々”、“卑しき人々”、“民衆派の人々”、“下賤の人々” 等全てを含んでゐると思われる。

## 五節

(1) 貴族階級 *τὸ βέλτιστον*

L-S-J sv. *βέλτιστος*。原語は *ἄριστος* の最上級である、道徳的意味合を多分に込めて使用される。(一節注<sup>④</sup>、Smyth § 319a 参照)。

作者は、貴族階級がいかに倫理的に秀でてゐるかを述べ、大衆の無知蒙昧が正しく貧困に起因すると指摘しながら、両階層の社会的身分的な面と経済的側面の関係を明確にしつゝある。そして、ここに作者の寡頭派的な立場が同時に明示されてゐる。

(2) 貴族と民主派の対立はボリス世界の歴史そのものと言える位で、両者の抗争の例を網羅的に列記するのは不可能である (Arist. Pol. V.10. 11; Thuc. III. 81, 2f; V. 31. 6; VIII.

47. 2)<sup>3</sup>

なや、貴族一平民、富裕者一貧民ないびにやれらにまつわる。

諸徳性の比較（優れ一不正）にみられる対概念的用法は、未ださへもと確立していながら、すでに本書にも用ひられてゐる。注目に恒なる。この点、久保正彰、『歴史記述と理

然的構成』『昭和』1980 Vol.11, p.3 参照。

(3) 放縦 *ἀκολασία*

Plat. Gorg. 505B. や参照。

(4)

長句 *ἀδικία*

Plat. Gorg. 477B etc. 参照。

(5) 原文は *τὰ χρηστά δοῦλο*。

(6) 黑点句 *ἀκριβεῖα*

Arist. Rhet. III. 1414. a10ff 参照。

(7) 無題……品脂……軽財 *ἀμαθία...ἀταξία...πονηρία*

Eur. Elec. 376ff ≈貧乏はこのひどい軽財があつて、逼迫した状況のためひどく悪を教へるやうのやうだ。(田中美知太郎訳)。

しかし、いつしたば衆評価は、作者の民衆に対する軽蔑心を考慮して読まなければならぬ。確かに、貧困故に教育を受けた者は少なかつたであつたが、一般市民は多かれ少なかれ読み書きは出来たのやうだ。この点、Harvey. F. D., "Literacy in the Athenian democracy" REG. vol. 79 (1966) p. 585-635 の精緻な論文を参照され。

(8) 原文に詰れがあるが、Bowersock のトサベトに従つて詰りしやく。詰説といふのは Kalinka p.109-111 参照。

## 六節

(1) 平等に *ἴσης ισης*

MSS は *ἴσης*。Bowersock のトサベトに従つ。

(2) 楽幅……詩譯 *ἀγέων λέγειν...βούλευειν*

*βούλευειν* の術語の意味はさておき、L-S-J sv. *βούλευειν*

B. 2 参照。

(3) 最も有能な人々と最も卓抜な人々 *τὸν δεξιωτότερον καὶ ἀνθρώπον ἀριστόν*

cf. Thuc. III. 37.3 ≈國に益する所では、遲鈍 (*ἀμαθία*) で分別をやがてはるゝ方が、駄目でもうつむ (*δέσιος*) 駄め恐れぬものより大いに貢献をなし、概して単純な頭の者たちの方が小懈口な衆よりも市民たつてゐる。シキティーネスでは *ἀμαθία* は *δέσιος* が突出されてゐる、前者が *demos* の特徴とするわれじやう。また Thuc. III. 82.7 や参照。

(4) やぐかじめいた *ἐκρήν*

≈やぐかじめいた *εἰδούς*。Goodwin § 415 参照。

(5) めんつたんじておひへが *ἡν ἀγαθία*  
日本では *ἡν ἀν ἀγαθία*。*ἡν* の有無による相違について  
は Goodwin § 402, § 410 参照。

(6) 衆衆 *ἄνθρωποι* *ἄνθρωπος πονηρός*

など *ἄνθρωπος* は蔑視の意味が含まれてゐる點を  
ね。L-S-J sv. *ἄνθρωπος* 4.

(7) 起立してたゞめ樂 *λέγων...ἀναστὰς*

分離の時制の差に注意 (Goodwin §139, 143 参照)。此等は人々は座つてゐた (11節ならむと注 ②, Frisch p. 198-199 参照)。

⑧ 当時、民衆が民会や評議会で發言するのを苦々しく思つて、民主制を批判する人がいたのをおいひ。しかし、本書の作者は、單純にこうした批判者に組しなる。由から民主制に賛成しないが、この制度が民衆の利益と密接に結びついている政治の現実を実に犀利な目でもつて分析してゐる。同類者は々については三章十節を参照。

## 七節

① 前文とのつながりである小辞が欠けていゝ所謂 asyndeton の文で、極めて唐突な印象を読者に与へる。

② いへした民主制批判は多かつたらしく。Aristoph. Eq. 191ff ≈ めいひ日の政治なんぞ、教育のある人や人格者のあらゆるべじやねつがやく。無学で下等な男の仕事などやかひな (紹平十秋訳)。あた、Eurip. Suppl. 403ff; 420ff; Hdt. III. 81. 2; Thuc. II. 37; III. 42. 2 参照。

当時、民主主の是非が盛んに論じられていた (Finley I. p. 41) が、本書の作者は前節注⑧でも述べたように皮相的な批判者ではなく、民主制の『効用』を熟知してゐた。

③ 身體眞 *eύνουσ*

原義は『好意』、『善意』であるが、作中の込められた皮肉や党派性を考慮していつて讀してみた。次の『懶意』 (*κακόδοντα*) が

おなじ語である。

④ 有益である *λειτερέτη*

*λέιτη + τέρος αέταιρος* 「彼の臣属のための獻供物」 費用をうへぐなつて (L-S-J sv. *λειτερέτης*, Frisk. H, *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, Heidelberg 1960-, sv. *λειτερέτης*. cf. Plat. Kratyl. 417C) 111節に出で来た *λειτερέτης* との意味は限定的である。

## 八節

① *μετέπε μέτε οὖν*

Denniston p. 470ff 参照。

② 風氣 *δαιτημάτων*

『制度』 との訳やねが、本書全体に余り術語は用ひられていないのじんべんついた。『生財の方法』 とも訳やねがもしれない。L-S-J sv. *δαιτημάτων*

③ 最善 *μέγιστη βελτίστη*

次に示されしる『難能にやへて能あるおこし』 国家を示す。

④ 以下、最善なる國家像を求めて邁進し、とかく現実に目を瞑りがちな哲学者の分析とは異なり、こゝども作者の鋭い現実分析が示されしる所のは、読みやねだおひつか。cf.

Plat. Pol. I. 338E.

⑤ *κακόδοντα εὔνομοιούμενης τῆς πόλεως* Ostwald p. 83. n. 1. の訳である。彼によれば、なんじ *εὔνομο-*

*eisōthōn* は理想的に良いとされるべきものではなく、誰かがそれを想むる意味である。 cf. Moore p.48-49; Andrewes, A., "Eunomia" CQ XXXII (1938)

p.89-102.

アルコス、*eūnomēisōthōn* た状態を *eūnomia* と、次に用いへば ≈ 賴  
しの國権 (*kakonovopia*) と表せた。

任職によれば、臣民は、國権が良いか悪いか、理想國家とは如何なべゆのかに関心はない、自分達が如何に利益を得、勝手に振るふるかに關心を持つてゐるだけである。同様な考えは Aristoph. Eq. 1121-1130 にも認められる。

アルコス、*eunomia* たの體は既に古ヘボメーロス (Od. XVII, 487) にも使用われてゐる。ヒュルタイオス、ソロノス來、カリシト人の政治思想が何を主張として用ひられ続ひてゐる、彼等の政治思想を概ね上位 | との立場上位の主張である。 Ostwald p. 62ff; RE. VI. p. 1129-1131 参照。

#### (6) 賴つかれ國権 *kakonovopia*

Ostwald p. 85 によると、このカリシト語は本所に由来するのみでない。返り咲したが、注(5)などは Ostwald loc. cit. n. 1 参照。

#### (7) わなた σὐ

この一人称をわなた、多べの議論があつたが、詮説は大体へじて分類出来ぬ。 いたず Kalinka p. 57, 117-119 に表わされた解釈で、具体的に特定の人物を想起する説。 わな | いたず Frisch p. 202, Kühner-Gerth II. i. p. 557 のもの | 般的に

人を示すことをなすものと誤がおる。筆者と後者の説に従ひ、同様な用法が以下、記述しうる。

### 九節

貴族國権 *eūnomia*

八節注(5)参照。

(2) 最も才たむた人々 *τοὺς δεξιωτάτους*

即ち最も才能ある貴族である。 Neil op. cit. p. 36 参照。

(3) 国民に対する *αἰρόις*

*αἰρόις* とは誰れか、選舉である。 Bowersock p. 479, Moore p. 38, Lactor p. 2 などは "in their own interest" す。

貴族を示すと見てよい。 みると、Kalinka p. 120 に従ひて = 国民 = と訳してある。 たゞ、Frisch p. 17 はその體を詮説する。

"庶民" (*ψᾶρος*) | 一般のことを Ostwald p. 21ff 著し p. 50 n. 3 参照。

(4) 貵族達は臣民達を

原文は *οἱ κρητοὶ τοὺς πονηρούς* である。

(5) 臨む *κολάσσουσιν*

Ostwald p. 83, n. 3 によると、この用法は單に臨むるのではなく、懲戒するに多く矯正的意味合が含まれてゐる可能性があるといふ。

(6) 帆軌を逸した人々 *μανοκένοντος ἀνθρώποντος*

直訳すれば "帆の冠した人々" である。 *μανοκένον* は

『眞が眞へ』の外に『眞だね』だらの意味がある (L-S-J sv. *μαίνομαι* cf. Plat. Leg. 773D) ので、『過激派の人々』との訳がややこしい。cf. *Oxford Latin Dictionary*, fasc.

IV. sv. *insanus* 4. Theog. 313-314 参照。  
 (7) 原文は *ἀπὸ τούτων...τῶν ἀγαθῶν* です。

(8) 奴隸状態に *εἰς δουλείαν*

冠幅の複数の *τέλεστα* Kalinka p.121, Smyth §1126, 1135 参照。これいどもれば、文外傳の奴隸でなく、奴隸的な、般状態が示す。

## 十編

(1) 他方 *δ' αὐτόν*

L-S-J sv. *αὐτόν* II.2, Smyth §2839. 例句、市民との戦争で来たのを皮肉して、三十節から十一節までは奴隸、メーヘンイなど非市民について語りこへ。従ひて、確かに前節との組み合わせて、明確でなにかの小説を余すと alike (Frisch p. 203-204) 必要はなかへ。

(2) 奴隸 *τῶν δούλων*

奴隸の生産と闇合には、種々な本があり邦文もこゝだ、最近太田秀通著『ヨーロッパの市民生産』(『古典の世界歴史』東京 1975. vol. 3 所収) p. 175ff があつたが、Ehrenberg, V, *The people of Aristophanes*, New York 1962' (特に四章) やアーノルド・カムラの本である。

奴隸の放縛あは、かなり誇張があつたが、アリストペネス

の事蹟などもあれば、それは周知の通りである。

(3) メトイコイなどについては我が國でも優れた研究がなされてゐるが、一節注(4)の Whitehead の本の外は、わしあたいて、村川 p. 229. 丸 111 を参照。

(4) 手續 *πατέρεων*

cf. Aristoph. Nub. 6ff. テーナイヤーは、他人の奴隸に暴行を加えたつたる *γραφὴ βίβεως* に論じられて (Lipsius p. 427ff)。この、世人が罰で、奴隸を殴打したんだよな、種々な皮肉が付いてゐる (Aristoph. Eq. 5, 27ff; Vesp. 449ff etc; Ehrenberg op. cit. p. 186ff; Lipsius p. 428. n. 33; Zimmerman p. 380ff 参照)。

本書の訳者は翻訳者によつて書かれてゐる。テーナイヤーは奴隸と主人の関係は多種多様でもつたらしい、或る例もかたのほんの一部でしょ。Plat. Symp. 175B; Xen. Oik. III.4; Harrison I. p. 171ff 参照。

上記の反対に、ペペルタウは家畜扱ふれられた (Arist. Pol. II. 1263. a35)。

(5) 出生率 *τὸν γένετον γένετον* Plat. Rep. VIII. 562Bff. 奴隸の態度 *τέλεστα* op. cit. 563B 参照。

(6) なし *οὐ σπέκειν*

初期散文では希だ翻訳されない (L-S-J sv. *σπέκειν*; Kühner-Gerth I.2. p. 251)。

(7) 敵 *τὸν πειρατὴν* *σπάταξεν* *ἀντί*

三人称単数であるが、主語は特定の人ではなく、皿田人一般

だね (Schwyzer II. p. 245 参照)。作者は笑いながら本文を書いたのだといふか、わざとめがし的な顔をして書いたのだろうか。この点につてもじぶん皮肉をひえて作者の嫉妬を感じる。Arist. Rhet. II. 10. 1387b 20 参照。

(8) 原文 *τὸν πόλεων* である。この語は大いに、貧困を示す狭義な用法で、市民全体を示す廣義な用法がある。この点の詳細な議論だ。de Ste Croix, G. E. M., "The character of the Athenian empire" *Historia* III (1954/55) p. 1-41 特に III 章を参照。

(9) 詳しく述べ、Ehrenberg op.cit. p. 184-187 を参照。彼によれば、作者の記述は全体に誇張があつた。

## 十一節

(1) 海上支配により利益を得てゐるのは市民だけではなく、奴隸の生活をも豊かにしてゐるだけだし作者の慧眼と云ふべき。

本節からして、アテナイの海軍力はまだ安泰であったと思われるのだが、本書の成立は、アテナイのシッリー遠征失敗(BC 111年)より以前であると考えられる。従って、Huks p. 34. n. 37 のように制作年代を BC 1 年とする論拠は極めて弱いと思ふよ。

(2) 収入の一端 *τὰς ἀποφοράς* L-S-J sv. *ἀποφορά*. 主人が奴隸を賃貸して、奴隸より得る金のこと。Xen. Poloi. IV. 14 参照。

この所は原文に疑問があるのに、全体として Bowersock の訳に従つておこた。詳細は Kalinka loc. cit.; Frisch p. 209 参照。

(4) 皿田による *ἱλευθέρος ἀφέναι* 奴隸を解放する歴の定句であるが、ここでは、前文からして文字通り解放するのではなく、あたかも解放したかの如く自由にやせるところであつた。

(5) あなた *σέ*

一人称単数で一般的な意味に使用われており、*της* に近い (Schwyzer II. p. 244)。八節注(7)を参照。

(6) 私の奴隸 *ὁ οἰκός δοῦλος* 前の文章の『私の奴隸』 (*τὸν οἰκὸν δοῦλον*) は一人物でな

う奴隸の扱いの異なる国での、奴隸の行動の違いなのである。すなわち、前の文章の『私の奴隸』は、アテナイ市民を主人として、アテナイに居る奴隸を示すのに対し、ここのが『私

(3) 奴隸に隸從 *τοῖς ἀνδραπόδοις δοὐλεύειν*

与格 *ἀνδραπόδοις* は *ἀναγκή* とかむしゅ *δοὐλεύειν* にかけられ文法的には問題はない。むし、前者にかかる *δοὐλεύειν* の主語は奴隸になるが、*ἀφέναι* の主語は市民となる。むし、たな *anacoluthon* が無理があつたわけ (cf. Kalinka p. 130ff), Bowersock に従ふ。後者にかかる、不定冠の *οἰκός* を第 1 にしたがふだ。

の奴隸<sup>⑥</sup>は一つの思考実験として、場をスペルタに移し、主人をラケダイモン人と考えた場合での奴隸の行動様式を述べてゐる。この文は、*σέρπος...σόρπος* と並んで重複を避けた修辞学的技巧によるもの（Blass, F, *Die attische Beredsamkeit, Leipzig, 1887, Vol. I p. 277.*）。

従つて、本文より、作者がスペルタに住み、やうに奴隸を持てていたと結論づけられるのは出来ない。

⑦、作者は、海軍国としての経済発展が、奴隸と自由人との主従關係やえも変えたことを指摘してゐる。スペルタのように田舎の残つてゐる所では奴隸は主人を恐れるが、アテナイではどうした倫理觀はもはや崩れ、問題が生じれば、奴隸は金と並んで經濟手段でもつて事を解決しようとする。作者はいつしたばやを、多分に誇張しながらも、皮肉してゐるのである。

## 十一編

### 市民 *αστόν*

① 市民 *αστόν* とは市の住民を中心とした私法的な権利 (civil rights) のみを持つ人を指すのに對して、町の市民である *πολίτης* は加へて、參政権をも所有する人である (L-S-J sv. *αστός*)。eg. Thuc. VI. 54. 2. Arist. Pol. III. 1278. a34.

メトイコイは商売にたずねわっていたため、經濟の中心であつたアーナイの町中に多数住んでいたのであつた。

② 聖經の聖母 *Ιεροποιία* 文字通り、平等、同等に意見を述べる由。

由。こゝでは、もちろん、政治的な意味で厳密に用ひられたのではなく、対等にとか率直にとかの意味である。しかし、こゝに書かれた由はあれども、一部の保守派の人々には奴隸が放逐された理由があれども、一部の保守派の人々には奴隸が放逐された理由（akolasia, 十節参照）も聽いたのである。cf. Hdt. V. 78; Plat. Crito. 50E.

*isēgoria* の聖經全体について Busolt SK. p. 418, 453 なども Ostwald p. 109, n. 2 を参照。

③ 作者がこゝでは、我々アテナイ人と述べてゐるとは注目に趣する。

④ メトイコイは不動産の取得権がない、種々な商工業、貿易等に從事していた。村川 p. 229. 注13参照。

⑤ 一節注④を参照。作者は十九節や一章一節などからいふ、海軍の重要性をはつきり認識していたことがうかがい知れる。

## 十二編

### スペルタでは、幼少から厳格な訓練をはじめ、勇敢の涵養

について、Thuc. II. 39. 1. cf. Xen. Rep. Lac. IV. 7)、"無用の技術に長じぬる" (Thuc. I. 84. 3) せなかいたゞれば、われてゐるが、一般にギリシアでは、体育や音楽を嗜むの以上流社会の重要な教養の一つであった。

アテナイでは、子供達は読み書きを教へられる他に、音楽や体育を學ぶ (Plat. Protag. 326A ff)、法律や慣習に従つて、親は、子供や姉妹や体育で教育するのが願わしきであつた (Plat. Crito. 50D)。優れた人々は、運動競技、舞ごとに音楽に

アリストフニス (Aristoph. Ran. 729) ≈戯劇をだべる所 湯浴  
アリストフニス (Aristoph. Eq. 579-580) ≈戯劇をだ  
のドネ。 Xen. Mem. III. 5. 15f; 12. 5f. 終盤。

戯劇といふト、アトリエの都<sup>アトリエ</sup>。 Rep. III. 398C-399D;

Leg. II. 653D-673; VII. 795A-812E 終盤。トコヌトノベ  
のルボリ<sup>アトリエ</sup>。 Polit. VIII. 1339a-1342b. 終盤。

(2) アトリエ καταλέγειν  
Kalinka p. 137ff などが取<sup>アトリエ</sup>法的な禁止説は取<sup>アトリエ</sup>だ。

Moore p. 49; Frisch p. 211ff 認<sup>アトリエ</sup>従<sup>アトリエ</sup>。

(3) ノの足、トキヌトの脚筋<sup>アトリエ</sup>。 Marchant のトキヌト  
に従<sup>アトリエ</sup>読<sup>アトリエ</sup>。 cf. Rupprecht p. 30ff.

(4) 詩歌<sup>アトリエ</sup>本體<sup>アトリエ</sup>に専念<sup>アトリエ</sup>したの賃金が  
必要<sup>アトリエ</sup>だ。民衆<sup>アトリエ</sup>した教育を教わ<sup>アトリエ</sup>とは賃<sup>アトリエ</sup>した<sup>アトリエ</sup>。

(5) アトリエ (cf. 11章十節) がだ。 Aristoph. Eq. 188, 191 だ  
いふ<sup>アトリエ</sup> Neil op.cit. の戯劇<sup>アトリエ</sup>。 たゞ、 ≈アトリエ ≈アトリエ  
脚<sup>アトリエ</sup> γρόνος...νομίζων の文語<sup>アトリエ</sup>の脚筋<sup>アトリエ</sup>に注意<sup>アトリエ</sup>。

(5) 合唱隊奉仕 χορηγίας

テナリハ<sup>アトリエ</sup>の祭典<sup>アトリエ</sup>に催<sup>アトリエ</sup>る悲劇<sup>アトリエ</sup>や喜劇<sup>アトリエ</sup>の上

演に必要な諸経費を提供<sup>アトリエ</sup>する事だ。ノの出<sup>アトリエ</sup>おだる人が合唱

隊奉仕者 (χορηγός) と呼<sup>アトリエ</sup>。 彼は脚筋<sup>アトリエ</sup>の内も<sup>アトリエ</sup>脚筋<sup>アトリエ</sup>の

れ、劇の上演に必要な合唱隊の練習費用、歌手やフルート奏者  
の手料、衣装の支度、指導者<sup>アトリエ</sup>の口当等多大の出費を負<sup>アトリエ</sup>う  
れだ。アルコ<sup>アトリエ</sup>、民衆<sup>アトリエ</sup>の際<sup>アトリエ</sup>賃金を課<sup>アトリエ</sup>たのドネ。<sup>アトリエ</sup>  
AP. LIV. 8; LVI. 3; 末三 p. 250, Parke p. 131ff. やうと<sup>アトリエ</sup>

黒レ<sup>アトリエ</sup>取<sup>アトリエ</sup>だ<sup>アトリエ</sup>。 Pickard-Cambridge-Gould-  
ストリート<sup>アトリエ</sup> (Aristoph. Ran. 729) ≈戯劇をだべる所 湯浴  
Lewis, *The dramatic festivals of Athens*, Oxford 1968  
(2. ed), 第2 p. 86ff; Pickard-Cambridge, *Dithyramb*  
*tragedy and comedy*, Oxford 1962. p. 36ff, Busolt SK p.  
975, 1086 終盤。

(6) 体育奉仕 γυμναστήριος

大ペ<sup>アトリエ</sup>ントルーナメント<sup>アトリエ</sup>プロメトカ<sup>アトリエ</sup>の祭に行な<sup>アトリエ</sup>ねれた松明  
競争に出現<sup>アトリエ</sup>する選手<sup>アトリエ</sup>の腰<sup>アトリエ</sup>の腰<sup>アトリエ</sup>の腰<sup>アトリエ</sup>、 盤費<sup>アトリエ</sup>と  
練<sup>アトリエ</sup>わ<sup>アトリエ</sup>士事<sup>アトリエ</sup>。 ノ<sup>アトリエ</sup>を<sup>アトリエ</sup>人が、 γυμναστήριος (体育奉仕者)  
ドネ。 Busolt SK p. 494ff, 976ff. RE. VII. 2. p. 1987-1991  
参照。

(7) 川路運船奉仕 τριπαράρχιος

AP. LIII. 2; 末三 p. 273 付 4; Busolt SK. p. 1199f 終盤。  
ノの奉仕<sup>アトリエ</sup>あだ<sup>アトリエ</sup>人が、 τριπαράρχος と<sup>アトリエ</sup>。

(8) 奉仕と<sup>アトリエ</sup>

原文は Χορηγεῖται, τριπαράρχεῖται, γυμναστηρίται と<sup>アトリエ</sup>取<sup>アトリエ</sup>  
じぬ<sup>アトリエ</sup>が、仮<sup>アトリエ</sup>して<sup>アトリエ</sup>ひ<sup>アトリエ</sup>みだ。 各脚<sup>アトリエ</sup>いふト<sup>アトリエ</sup> L-S-J, Pas-

sow を<sup>アトリエ</sup>参照。

(9) ソウ γοῦν

Denniston p. 451 終盤。

(10) ノ<sup>アトリエ</sup>の所謂公共奉仕 (Leitourgia) は貴族<sup>アトリエ</sup>に<sup>アトリエ</sup>かなる  
の負担<sup>アトリエ</sup>だ (Xen. Sym. 4. 29ff)。 ノ<sup>アトリエ</sup>の金額<sup>アトリエ</sup>の推定<sup>アトリエ</sup>で<sup>アトリエ</sup>  
いだ。 Frisch p. 215; Busolt SK p. 1201f; RE. XII. 2.  
p. 1874 終盤。 Moore p. 49 と<sup>アトリエ</sup>く、 合唱隊奉仕が、 悲劇<sup>アトリエ</sup>

合唱隊のために 1-2 タラント、喜劇のためにそれ以上の金が必要で、三段櫂船奉仕者が三段櫂船一隻を一年にわたり維持するには、一タラント必要であったのに拘らず、漸時、貧民家族の年間生活費は僅か 1-2 タラントであったといふ。

cf. Arist. Pol. V.5.1305 alf; V.11.1313 b10f.

なお、この部分も本書成立の年代を考察する上に問題となる箇所である。作者は「シド、市民とメイドの財産に従事して輪廻した eisphora (財産税)」について回の述べてこなす。この財産税が「導入されたかはなし、かつしないが (cf.

Thomsen, R., *Eisphora, a study of direct taxation in ancient Athens*, Copenhagen 1964, Chap VII」、母本注に確実な最古の実施例は因11-7年(?)のもの (Thuc. III. 19.1)° cf. Lewis-Meiggs No. 58, 脚注 p.161°

作者が「シドの税のことを軽視しているのだ、本軸の成立が四一八年以前であつたためか、それとも、この制度について心配したことから逃げたのが、Gomme だ。本書の成立年代を四一〇~四一一年とするが、この時代の本軸の成立年代が四一八年より以前であつた可能性がある」と述べる (Gomme p.227 参照)。

(1) 二二節注⑤参照。

## 十四節

① ハード、柱題が急に変り、「章十六節までは、アテナイが同盟國をどのように支配してゐたか述べられてゐる。

アテナイの同盟國支配の実態については種々な本、論文があるが、中でも、ATL, Meiggs を参照。同盟國支配の具体的な法令として、Meiggs-Lewis No.52 のカルキス法令、No.40 のハーリア法令、No.43 の「スレス法令」、No.45 の段量衡強制法などがある。これらは違反者に対する处罚が規定されている。また、文献史料としては、ハルモニアがある。Thuc. III. 27ff の「リケンノーベ反乱の記述」、II. 63 の「クレス演説」を参照。cf. Thuc. II. 13. 2°

(2) 同盟國 τῶν συμμάχων

σὺν + μάχεσθαι λέγει 文字通り攻守同盟にわたり共に戦つたの同盟。cf. ἐπιμάχεσθαι。

③ 德の忠誠やだる συκοφαντόστης  
I. Chap. III. 参照。

L-S-J. sv. συκοφάντης 3.

政治家トローナー、德の忠誠が「忠誠」であるとした (Arist. Pol. V.1304 b20ff, Aristoph. Aves. 1422)。忠誠忠誠のトローナー、母本三 p.215. 姉9; 論述 Lofberg. J.O., *Sycophancy in Athens*, Chicago 1917 (rep. 1976), Bonner-Smith II. p.39ff. 参照。

(4) 運輸業 μυσοῦστη

同盟國トローナーの課徴である。庶民と貴族の内訌を起し、トローナー Thuc. I. 76.2 参照。また、かなり後の時代になると、

メロス談議との連の都合である (Thuc. V. 89ff 参照)。本節  
注(2)も参照。

(5) 貴族達 *Xρῆστοι*

MSS *ἰσχυροὶ* である。

(6) アテナイ民衆 *τὸν δῆμον τὸν Ἀθηναῖον*

この *dēmos* の意味は、国民全体を意味ではなく、狭義の  
用法で民衆を意味する。11章十九節ないしは1章十節注(8)を参照。

なお、有力者排斥についていえば、時代が異なるが、Hdt. V. 92  
の伝えるトランサーロスにおける話が思ひ出される。

(7) ヒの故に *διὰ ταῦτα*

理由ひばるく文は明示されていない。前の文の“知りてい  
るから” (*γνωσκούσεις δέ*) の内容が理由ひたしてくると思わ  
れる。

(8) 市民權を剥奪 *ἀπομόνωσι*

11章十一節ないしに注をみよ。詳しく述 Busolt SK. p.

95ff. 参照。

(9) 遣放し *ἐξεγενέσθαι*

中動相は、単に祖国からだけではなく、同盟諸國全体から遣  
放されるという意味ある (Kalinka p. 152) と解ねる。Bonner-

Smith II. p. 246-248 参照。

追放された人々は貴族や親スパルタ派の人々であつたが、同  
時に、同盟諸国の中には民主制を採用してない國も存在した。  
この点は ATL III. p. 149ff 参照。

(10) 保護する *σώζονται*

『アテナイ人の國權』の編者註 (ルの 1)

民衆は自派の勢力を“強化発展せんべく”のに対して、貴族は  
自派を保護していく。両者の違いに自派の立場の相異が示され  
てゐる。すなわち、民衆が勢力を振るつてゐる限り、貴族は守  
勢に立たざるを得ず、民衆は帝国内で積極的に自己の勢力拡大  
を図れるのである。

なお、本節の一節がほとんどのおおとベイオスによつて  
引用されている。Bowersock p. 482 を参照。

## 十日節

(1) 金を貢ぐ *Χρήματα εἰσφέρειν*

11章1節から考へても、所謂貢税 (*φόρος*) を意味すると思わ  
れる (cf. Moore p. 50)。しかし、内容的には貢税のみではなく  
して、いへじて“アテナイの個々人が…金を得る” いわゆる  
に、同盟國の払い戻税等種々な金を貢むと思われる。Aristoph.  
Vespa. 655ff 参照。

アテナイの力が同盟國からの資金収入に依存するところ  
れば Thuc. II. 13. 2 ほの體められる。

だが、Bowersock のキリストでは本節の冒頭部分 *εἰποι  
σὲ τις δέ* の次に *δέ* が欠如してゐる。

(2) 文字通りに市民の一人一人が同盟國の貢税の分前にあわか  
たわけではなく、三段櫂船の漕手の手当や裁判手数料などの名  
目で國より各人が金をもつたことを意味する。Aristoph.  
Vespa. 655ff. Plut. Per. 12 参照。

だが、アテナイの國庫収入額といふこと ATL III. p. 326-

345 参照。

(3) Kirchhoff p. 11ff. はしの文も、427/6年(アレクサンダー)の反乱が、Instinsky p. 18; Frisch p. 223 せんの誤解を補足してある。

(4) 地盤國はこぼしまでアテナイの諸國をもって反乱を起した。

の事 ATL III. p. 275ff 参照。

地盤國はもとに動かすやうにしたのは、古くは僭主アリカニアだ。AP. XVI. 3; Arist. Pol. V. 1311a; 1313b20; Plat. Rep. VIII. 567A 参照。

(5) アテナイの民衆の貧欲を、作者は徹底的に揶揄している。同盟國支配との競争アテナイの利益についた Meiggs p. 255ff 参照。

れじゆじふを脱してはならぬ。

(2) 裁判に、アテナイがどれ程介入したかを考える上でも、Thuc. I. 77.1 やむべく解釈が重要なポイントとなるが、意見の一致は未だに見られない。上記の久保の注を参照。もと一般論として Ste Croix. G. E. M., "Notes on jurisdiction in the Athenian empire" CQ. NS. XI (1961) p. 94ff; p. 268ff. Meiggs p. 220ff 参照。

わなみど、人々の往来を促した政治情況が、地盤方面にの大いな影響を及ぼし、ロイナーを生む一つの原因になった。Schwyzer I. p. 126ff 参照。

(3) *ἀντιλογίστας* は *ἀντὶ* よりて論じた。

(4) 供託金 *προτανεῖον*

三種類ある裁判手数料の内の一つで、訴訟を始めるにあたり原告被告者が出訴料の金を、裁決後、敗訴の者は国庫に取納される。Pollux. VIII. 38; Harrison II. p. 92ff; Lipsius p. 824ff; Bonner-Smith I. p. 63-65. 参照。

(5) 原文は *διένευστον* cf. *ἔτος*

(6) 貢金 *μοσθὸν*

陸續頃のアレクサンダーが始めた(AP. XXVII. 4, LXII. 2)。Aristoph. Vesp. 663 による御賛(國111年)題150タハヘンが陸續頃に支払われた。Jones p. 3ff 参照。

しかし、こうしたアテナイの民主制に対する作者の痛烈な皮肉が込められた的なアテナイの民主制に対する作者の痛烈な皮肉が込めら

(7) Aristoph. Vesp. 773; Nub. 208, まだ、本章十八節、十九節を参照。

(8) 裁判を通りて正論園を支配するだらけでなく、アテナイか  
の直接役人として正論諸國と往復する人もいた（十九節参照）。

episkopos & phrourarchos などがNittidio<sup>9</sup>。帝国支配の  
たる役人の数々役割など云々。Balcer. J. M., "Imperial  
magistrates in the Athenian empire" *Historia* XXV

1976 p.257-287 参照。

(9) 反アテナイ派の存在は十四節などから明らかにわかる。

## 十七節

① 日の一税 *ἡ ἔκαποστὴ...ἡ ἐν Πειραιῇ*

關稅の一種。Aristoph. Vesp. 658 など種々な種々な關稅が  
アテナイにはあつた。作者はいんじゆ經濟的な利益を  
指摘しつゝが、こやくもやわらかな和諧で、民主制の民衆の  
物欲に丸められた作者の嘲笑が感じられる。前節注①を参照。

② 埃及 *συνοικία*

關稅の一種。Aristoph. Vesp. 658 など種々な種々な關稅が  
アテナイにはあつた。作者はいんじゆ經濟的な利益を  
指摘しつゝが、こやくもやわらかな和諎で、民主制の民衆の  
物欲に丸められた作者の嘲笑が感じられる。前節注①を参照。

③ 馬車 *ἵππος*

11頭立てのロバや馬など牽引したのであつた。

④ 十一頭を參照。なお、貴賤されぬものとして、奴隸と家畜が  
並列に置かれることに注意。

『アテナイ人の關稅』の試訳前編 (p.1)

(5) 逃亡農 *κῆρυκες*

色々な任務に雇われたが、裁判にかかる職務として  
AP LXIV.3; LXVI.1; LXVIII.4; Aristoph. Vesp. 752-  
754 参照。

## 十八節

① 行く *ἵγεσσον*

*εἴλη* の Impf. 3 Pl. 整体では 1 節に *ἵγειν* やつむの刑が使  
われる。Kühner-Gerth I.2. p.217. n.3; Smyth § 775 参照。

② 宗軍 *στρατηγὸν*

宗軍の保護しつゝの種々な職務について Busolt SK. p.  
1121ff 参照。

③ 十三節注⑦参照。cf. Plut. Per. XI.

④ 大使 *πρέσβετος*

Aristoph. Achar. 60ff のやうなやう。この他、正論園と  
実際に起つた役人など云々。Balcer op. cit. 参照。

⑤ 四二八年の事であるが、アテナイの市町はアテナイ市  
の機嫌をとり、また時の民衆指導者の歓心を貰ひにくる。  
ふるわればアテナイに歸がれなきだらかいた（11章 1 節参  
照）。ふつた人々に家を賣買するのだが。

III.11.7, 久保訳) ふくべつら。がた、Aristoph. Ach. 633  
-645; Vesp. 666-679; Eq. 801-802 参照。

⑥ 誓願の蒙願は 1 節的も 1 だ。Plat. Apol. XXIII.  
34C; Aristoph. Vesp. 550ff.

⑦ 誰れどあれ入廷類へ……選手 *εἰσιόντος τον ἐπιλαμβάνεσθαι*

*τῆς κερός*

入廷細へだ、陸審員として法廷に入りて来るアーナイの申出だある。

じんとめのわくの属格の用法についてのべる。ホメロスは「金体」の部分の闘派 (Kühner-Gerth Oxford 1891 rep. 1974 p. 135) や「長手の船」の船頭など、いつもした用法は散文では極めて稀れた用法 (Smyth § 985) であつた。この用法は「*εἰδίωντος τού τα τῆς κερός*」とかけて所有の属格のみのが原因である。

(8) Thuc. I. 98.4; III. 10.5 参照。

## 十九節

(1) 十六節から前節までに述べられてきた裁判による利益に加えし、じにそれ以外の利益が突然述べられてくる。

(2) 国外にある財産 *τὴν κτήσιν τὴν ἐν τοῖς ὕπεροποιοῖς*

具体的な例として、ヘラクレトにおける銀丘 (Thuc. I. 101) や多くの植民市 (*κληρουχία*) などをあげるが、(著稿 ミックルーチア著、『歴史』vol. 41. 3-4 (1968-1969) 参照)。

まだ、個人的じめ国外に財産を所有してゐる人がいた。例えば、カニッサ (Xen. Sym. IV. 31) やヒカルーク (Xen.

Mem. II. 8.1) などである。

(3) 十八節参照。

(4) 従着構 *ἀκόλουθος*

あぐ後に出て来る奴隸である。

(5) 主人も奴隸の *kai ἀντὸν kai τὸν οἰκέτην*

じては Smyth § 1209.d; Schwyzer II. p. 211 参照。

(6) 専門用語 *διόμετρα*  
L-S-J sv. *διόμετρα* V

(7) ホメーロス以来、ギリシア人は船と密着した生活をしていた。じつした事実を反映してか、古典期の作品にはしばしば國家の比喩に船が用いられてくる (このよつた比喩の使い方は、私が聞いたからだ、寡聞がもしかだが、日本にはないやう)。例えば、Plat. Rep. VI. 488Aff Soph. Antig. 162f, 189f など の有名な例をはじめ、悲劇や喜劇に頻繁に見られる。詳しきは、Schmid-Stählin vol. I. 2. p. 495ff. 特に注参照。

あた、ペルタルコスのペラクレスは (XI. 4) じもと、ペラクレスは毎年六十隻の船を出して、多くの市民に六ヶ月間有給で航海させ、船をもつて技術を輸出せしめたといふ。Meiggs p. 427 じ、このペルタルコスの臣民は大半として出でる軍艦

## 二十節

(1) 経験……訓練 *ἐμπειρίαν...μελέτην*

あくと語つては、Plat. Leg. 804C; 857C, Phaid. 81A 参照。  
また、Thuc. I. 18.3; 142.6ff; II. 85.2 なども思ひたのよつて  
御壁もしく使田れどもた壁も思ひた。御壁にシキリイテバ

し非常に類似した発想が示されしる。11章1節注

⑦を参照。

② ここに船乗の『田中ローブス』が示されしる。1節ならびに注を参照。

③ 商船……貨物船 πλοῖον... ὀνείδα

共に、戦艦である二段櫂船に対する、一般の船を指す語である。Plat. Hipp. Mag. 295D, 貨物船の用例については、Hdt. III. 135; VII. 25 参照。

これらの船の構造的な相違については Morrison-William 特に p. 244ff 参照。

④ 従つて、三段櫂船の操縦にはかなり高度の技術を要したと思われる。

⑤ 駕船 νέας

「いかがだむだへ」三段櫂船を意味。Morrison-Williams p. 244 参照。

⑥ Thuc. I. 143.1; Plut. Per. XI 参照。

## 大南寔錄全二十卷今秋完結

ベトナム近世史の根本史料たる『大南婆錄』全五百三十八巻は、昭和十年故松本信廣名誉教授が阮朝政府に依頼して再印刷されて本邦に招来され、本塾図書館ほか東洋文庫など六ヶ所に分配されたが、その後の本邦のベトナム史研究の発展に伴ない、ベトナム史料の閲覧の要望が頓る高まってきたため、昭和三十六年に影印本を本塾大学言語文化研究所より出版することを企てられた。以後この二十年間に十九巻が刊行されたが、今秋には全二十巻が完結される予定である。なお影印版『大南寔錄』の購入を希望される方は本塾大学言語文化研究所までご照会されたい。  
(和田 正彦)